ことばとして学ぶ英語授業

― 母語による気づきを通して ―

学習開発分野（17220918）松　田　由　佳

英語をことばとして学ぶ過程で，母語による思考が気づきを生むため，外国語の学びには仕組みの運用と母語が重要な役割を果たす。これらをふまえ，オーセンティック教材である絵本を使った授業を実践した。その結果，母語による気づきが見られ，英語に苦手意識を持つ生徒の学びを保障する可能性が示唆された。一方で，効果的な足場かけとより多くの英語にふれる機会の重要性について課題が残った。

［キーワード］　外国語の学び，仕組みの運用，母語，学び合い，ジャンプの課題

１　はじめに

(1)本研究の主題

外国語の学びには，仕組みの運用と母語が重要な役割を持つことが分かってきている。仕組みの運用が重要であるのは，外国語は母語の習得とは違い意図的に運用することが必要とされているためである。母語の役割が重要であるのは，思考をともなうからである。ことばへの気づきが外国語の学びとなる。大津(2011)は，意図的・意識的な学習によって身につくのが外国語であり，仕組みを意識的に学ぶが，授業の中で訓練した英語は，実際の生活で用いることは滅多になく，母語や第二言語を身につける場合とははっきりと違う，と指摘している。

しかし，英語の授業のイメージと言えば，フラッシュカードでの発音練習，ダイアローグのパターン・プラクティスなどが多い上に，正しい発音ができることに価値を置くことが筆者にとっては強い。そのような反復練習の場面を参観したり，実施したりしてきた。一方で，生徒の姿に注目すると，反復練習に飽き，学びから離れてしまうことも少なくなかった。果たして，反復練習には仕組みの運用と母語による思考，それらによる気づきがあったのだろうか。英語の授業の中で，外国語の学びの機会として何を与えられるのだろう，学び手に何をさせたら外国語の学びとなるのだろうという問いが生まれた。

本研究では,外国語の学び方の理論を整理する。さらに，仕組みの運用と母語による思考が重要であることをふまえ，どうしたら授業の中でそれらを保障できるのかについて考え，実践する。そこで出会った実践的課題への可能性を模索していく。

(2)研究の方法

主題に迫るために次の課題を設定した。１つ目は英語の学び方について確認すること，２つ目は，英語を外国語として学ぶ授業づくりに実践し，そこで生徒に起こっていることを分析すること，３つ目として，１人で学ぶより協同的に学ぶことで英語学習の困難を乗り越える場面から，可能性を見出すことである。分析の対象は，筆者の教育専門実習Ⅱにおける市内Ｓ中学校の授業実践での授業記録をもとに検証していく。なお，生徒の名前はすべて仮名である。

２　先行研究

(1)英語の学び方

大津(2011)は，日常的には英語を使っていない環境で英語を外国語として学ぶときには，日本語がもっている性質について，英語の構造との大きな違いから相対化していくことが重要であり，母語を相対化し言葉への気づきを育て，母語を客観的に捉えることが公教育としての英語学習である，と指摘する。しかし,「狭義の第二言語習得理論[1)]」をもとにした授業では，構造を意識的に学ぶことよりも話せることが重要と見なされてしまい，訓練が多くなる。実際に生活する中で，訓練した英語を使う場面はほぼないために，意識していないことは忘れてしまう結果になる。

(2)母語による思考の重要性

内田(2014)は母語について以下のように述べている。母語は瞬時にその意味とニュアンスを理解でき，母語だけが言語の土壌となりうる。母語だ

からこそ微妙なニュアンスの違いを使い分けつつ相手と的確にコミュニケーションできる。

このことから，英語の仕組みを意識的に理解するには，母語での思考が必要不可欠となると言える。「英語の授業は英語で行うこと」と聞くと，授業での使用言語はすべて英語にすべきと捉えがちであるが，生徒の思考の場面は母語でなければ思考や学びは深まらないと考えられる。

(3)これまで行ってきた絵本を使った実践

英語の仕組みを意図的に学習し，母語で思考する授業とはどのようにすればよいのか。筆者は現任校の教員らとともにオーセンティック教材である絵本を使う授業実践に挑戦してきた。絵本を使用する理由は大きく２つある。１つ目は英語の仕組みを絵本の絵と文脈から推測でき，意図的に仕組みに気づかせる可能性があること，２つ目として既習以上の単語と出会えることである。さらに，「ジャンプの課題」を問うことで母語を使って思考する時間を設定できる。

佐藤(2012) は,学びにおいてもっとも重要なことは生徒が夢中になることだが,「ジャンプの課題」はそれを実現してくれる，と指摘している。筆者は教育専門実習Ⅱにおいても絵本を使いながら「ジャンプの課題」を設定した授業を実践してきた。これまでの実践から分かったこと，さらには実践上の課題から見えてきたことをまとめたい。

３　実践と考察

(1)市内Ｓ中学校での授業実践エピソード１

中学２年のあるクラス 33 名。“An Elephant & Peggie Book”の絵本を使い，There is / are ～. を言語材料にして，使う場面について考える授業を実践した。授業を観察していると，けんじ君は分からなそうにしていて，けんじ君のような生徒がどんな風に英語の学びに参加するのかということが気にかかった。けんじ君は人とつながるのが得意な生徒だが，英語の授業では仕方なく勉強している感じが見られ，特に教師の長い説明や運用練習のときは飽きた表情や態度を表してしまう。同じグループにいるそうた君は英語が得意な生徒であり，みゆさんは思ったことをすぐに表現したりおもしろいときは素直に笑ったりする生徒である。そうした３人がどんな風に学んでいくかに着目した。普段はなかなか参加しないけんじ君が，辞書を手掛かりに学びに参加する様子を見ることができた。

エピソード１「母語使用が参加を保証する」

そうた君とみゆさんはＩ am afraid to ask….という文の解釈に迷っていた。２人は afraid の後ろの to を，辞書では of が使われた慣用句の形で見つけたが，to での意味は載っておらず難しさを感じているようだった。けんじ君は辞書をずっと見ているが，２人の対話に入っていくには距離があるように見えた。それまでテンポの速かったそうた君とみゆさんの中には，なかなかけんじ君が入る隙がなさそうだった。２人のペースで解釈を進めていた。be afraid to の意味を辞書の of から理解しようとしたとき，そうた君の言いよどみがあった。さっきまですらすらと話していたそうた君のことばがたどたどしくなった。けんじ君がその隙を見つけて同じ所で質問を投げかけた。

そうた君「ask…たずねることができない…？」

けんじ君「ask ってどういう意味？」

しかし，けんじ君の質問は２人に届かなかった。けんじ君は「自分のことばは届かなかったか」というような表情だったが，辞書という３人をつなぐアイテムを大切にしていた。質問が届かなくとも辞書を見ることをやめなかった。状況が変わったのは，be afraid to に ask を含めて意味を再び考え始めたときである。３人は別々の辞書を使っていたが，みゆさんの辞書には載っていない be afraid to がけんじ君の辞書に載っていた。そこでけんじ君は自分が見ている辞書の部分を２人に見せた。２人はけんじ君の辞書を，身を乗り出してぐっと覗き込んだ。みゆさんとそうた君は，けんじ君の辞書で確信したように意味をつかみかけ，英文の意味を解釈し始めた。

そうた君「あ！分かった！私は怖くてできないってことでしょ，ピギーに！」

そうた君とみゆさんはようやく分かった，というようにすっきりとした表情を見せた。そんな２人を見たけんじ君は嬉しそうな表情になって口笛を吹いていた。

けんじ君は，最初，２人のテンポの速いやりとりの中で，なかなか参加する機会をつくれずにいた。しかし，けんじ君の参加を支えたのは辞書の存在であった。辞書を見ながら，２人の対話に入る機会をうかがいつつ，辞書に載っている意味を足場にして，２人の議論に加わることができた。

内田(2014)は，外国語の学びにおける母語の重要性を指摘しているが，けんじ君は母語によるやりとりがあるからこそ，参加する機会をつくることができている。

一方，３人の思考についてはまだまだ深くはない。みゆさんが単語を１つ１つ調べながら「分からない」と発しているように，３人とも辞書に答えが載っているかのように使っている。ここにある試行錯誤は，辞書にあることばをパズルのように置き換えることにとどまっている。筆者は母語による思考としてはまだ足りないのではないか，と考えた。このエピソードは，次のエピソード２の学びにつながっていくことになった。

(2) 市内Ｓ中学校での授業実践エピソード２

同じグループの続きの場面である。学びに参加し始めたけんじ君と２人が，文脈に合わせて単語の意味を検討し始めた様子を見ることができた。

エピソード２「辞書を足掛かりにして母語で思考し気づいていく」

少し前まで，みゆさんとそうた君の議論に入りにくそうに見えたけんじ君が２人とつながった。絵本には“The eggs are gone.”という解釈が難しい文がある。gone の意味が分からないだけでなく，辞書で調べたとしても，日本人向けの辞書には最初に go の過去分詞と載っているからである。３人は一緒に絵本の文を読み進めながらこの文に差しかかり，gone という単語をそれぞれの辞書で調べ始めた。最初に gone を見つけたのはけんじ君だった。

けんじ君「…過去分詞？」

みゆさん「(私の辞書には)ないんだけど。」

けんじ君は，過去分詞の部分には意味が書かれていなかったために，すぐ下の形容詞としての意味を２人に伝えた。

けんじ君「過ぎ去った？」

そうた君はそれを聞いて，腑に落ちないような顔をした。「過ぎ去った」では意味が通らない。辞書で調べたことばを文に当てはめて，詰まってしまった。しかしまもなく，３人は絵を眺めながら，ことばや絵を頼りに，母語によるやりとりを通して，物語の文脈に照らし合わせ，意味が通る訳を考え出した。

そうた君「過ぎ去った…なくなった？　去る，というより，なくなる？…卵はなくなりましたか，ではない？」

gone を探せないみゆさんは辞書をあきらめ「gone ってどういう意味なの？」と２人に聞いた。

そうた君「卵はなくなりましたか。」

そうた君はみゆさんに gone の意味を含めて伝えた。けんじ君はみゆさんに自分が調べた意味で伝えてみる。「卵は去る？」しかしその後，そうた君に「去る」ではおかしいから「なくなる」と直される。するとけんじ君とそうた君のやりとりを聞きながら思考していたみゆさんが，その直前の文“I have a good news.”の文脈と単語の意味をつなげて，分かったというような顔をした。

みゆさん「あ！だから，いいニュースがあるって言ったのか。」

みゆさんの気づきでけんじ君も文脈に合わせた意味に気づいた。

けんじ君「いいニュースがあるよって言われたから，(ほしくない卵は)なくなったの？って思ったんじゃない？」

３人は同じ速さで学びが進むようになり，けんじ君に笑顔が出てきた。意味の検討に参加できているからであろう。母語によるやりとりがけんじ君を安心させているのだろうと筆者は感じた。

３人は，当初，単語パズルのような組み合わせで文の意味をとっていた。それから，単語の意味を文脈に合わせて議論しながら思考する学びに進んでいった。けんじ君は最初，gone を「去る」と捉えていた。しかし，「去る」では意味をとることができないということに気づいた。１つの単語がもつ意味合いと物語の文脈を照らし合わせるやりとりで，３人のことばに広がりが生まれた。

内田(2014)が，母語だけが言語の土壌となり，母語だからこそ微妙なニュアンスの違いを使い分けつつ相手と的確にコミュニケーションできる，と言っているように，思考を議論させるには母語が重要であることが分かる。

このエピソードで，gone の意味を「去る」と捉えた後，そのことばの意味を文脈に合わせて変化させるやりとりが行われている。「去る」，「その場所からなくなる」，「頭の上からどこかへ向けて(い)なくなる」と，ニュアンスを変えていく。このようにして訳すという理解を生み出している背景にあるのが，母語によるやりとりと絵を手掛かりにしたコミュニケーションであった。

２つ目として，母語や絵を頼りにしたやりとりを生み出したのが，学び合いにおける「ジャンプの課題」である。佐藤(2012)は,「ジャンプの課題」のレベルは高ければ高いほどよい，と指摘している。gone は中学２年生の終盤に過去分詞として初めて出会うことが多い。したがって，gone は３人にとって難しい単語であった。辞書を使って調べ，絵を頼りに母語で検討し学びが進んでいった。「ジャンプの課題」でこのように母語や絵を頻繁に活用しているとするならば,「ジャンプの課題」になる文や問いを入れていく必要があるのだろう。今回実践した授業では，筆者が設定した「ジャンプの課題」とは別のところにも「ジャンプの課題」が生まれ，このようなやりとりになった。授業ではよく，習ったことを練習することが多く見られるが，習ったから解けるのではなく，習ってはいないけれども読んで解釈してみるとおもしろいと思わせる教材を積極的に取り入れていくことの意義が分かった。

４　おわりに

本研究を通して，次のことを見出した。１つ目は，思考する場面で母語を使うことは，特に英語に苦手意識のある生徒が参加できる機会を生み，安心して対話することにつながるということだ。

２つ目は，絵本を使った授業の可能性である。絵本を使うことでことばへの気づきが生まれている。分からない単語と出会ったとき，辞書で調べてみることから，直訳不能性に気づき，ことばのニュアンスの微妙な違いについて思考を働かせていた。狭義の第二言語習得理論ではことばの学びになりにくく，母語を通した外国語学習が必要であることも実践から裏付けられた。

３つ目は，英語の学びの「協同的な学び」における「ジャンプの課題」の意義である。難問への挑戦があり，その中で生まれるコミュニケーションは，どんな生徒にも参加の余地を与えながら協同して学ぶ雰囲気を生む。思考の時間はテンポを落とし，明確な答えがでないからこそ，入り込む機会を生み，多様な思考が可能になると言える。

一方で，英語の絵本の弱みも明らかになった。それは，英語の仕組みが見えにくくなることである。絵本は絵が多いために，英文を読まなくてもストーリーが分かる場合も多い。分かっていることを足場かけにして参加する良い面もあるが，英文よりも絵に頼ってしまうと仕組みが見えにくくなる。また，仕組みの運用と母語の思考を重要視すると，英語そのもののインプットが減ってしまう。本来，外国語の学びとして英語をシャワーのように浴びるインプットも重要であるにもかかわらず，英語の授業で英語そのものが聞こえない。したがって，オーセンティック教材を活用した授業における実践的課題は，足場を外しながら仕組みに注目させる教材の開発と，シャワーのように浴びるインプットを増やすことであると言える。

以上をふまえて，今後は，絵本に加えて，英字新聞や英語のニュース，文学作品を使った教材も取り入れるなど，生徒が多くの英語にふれる機会を保障する授業づくりに挑戦していきたい。

注

1)「狭義の第二言語」とは，大津(2011)によれば，生後ある時点からふれていることによって自然に身に付いた母語以外の言語のことを言う。その狭義の第二言語と外国語(意図的な学習によって身についた言語)を合わせて「広義の第二言語」と呼ぶことがある。

引用文献

江利川春雄・斎藤兆史・鳥飼玖美子・大津由紀雄(2014)『学校教育は何のため？』，ひつじ書房，p. 108.

佐藤学(2012)『学校を改革する－学びの共同体の構想と実践－』，岩波ブックレット 842，p. 28.

佐藤学・内田信子・大津由紀雄(2011)『佐藤学 内田信子 大津由紀雄が語ることばの学び, 英語の学び』，ラボ教育センター，p. 25.

参考文献

藤原康弘・仲潔・寺沢拓敬(2017)『これからの英語教育の話をしよう』，ひつじ書房.

大津由紀雄・鳥飼玖美子・江利川春雄・斎藤兆史(2017)『英語だけの外国語教育は失敗する－複言語主義のすすめ－』，ひつじ書房.

鳥飼玖美子(2015)『本物の英語力』，講談社現代新書.

English Classes for Learning as Foreign Language: With Realizing Structure of English and Mother Tongue on Collaborative Learning

Yuka MATSUDA